

どんな組織や運動であっても、それが長期的に順調に発展できるかどうかは、世代交代がうまくいくか否かにかかっているといわれる。協同組合運動もまた然りである。100年以上前に刊行された協同組合関係の文献のなかにも、すでに若い人々をいかに運動に呼び込むかが論じられている例があるが、いま21世紀を迎えて、協同組合運動における若年層、青年の問題に、ますます注目が集まっている。今年だけでも、3月に「青年協同フォーラム」、6月に「ICAアジア太平洋地域青年セミナー」、10月に日本協同組合学会大会地域シンポジウム「現代の若者と協同」と全国的行事が目白押しである。

しかしそれは、これまでの協同組合運動が決して若者たちに「うける」ものではなかったことの裏返し、反省でもあるだろう。農協も生協も、このままではいずれ高齢者協同組合に転換する・・・というのは悪い冗談だが、21世紀は「非営利・協同」の時代などと称されるにもかかわらず、「非営利・協同セクター」の中心的存在を自認する協同組合が、若者たちに決して魅力ある存在とは映っていないことを、協同組合陣営は深刻に受け止めるべきである。かつて荷見武敬氏が、明治学院大学と日本大学で「協同組合論」を受講する学生を対象にして農協や生協がどんなイメージをもたれているか調査されたことがある（『生活協同組合研究』1995年5月号）。このアンケートでは、あまりよいイメージがもたれていない農協に比べて、生協には好意的な感想を寄せる学生が比較的多かったが、おそらく現在では、生協に対してもごくふつうの若者たちはそれほど好意的ではないのではないが、いい印象をもつか否かという以前に、そもそも協同組合というものに対して関心を示すということがまずあり得ないだろう。

そのひとつの原因は、彼ら・彼女らが協同組合というものについて、何か知るという機会をほとんどまったくもたないということがあげられよう。社会科学を学ぶ大学生でさえ、講義のなかで協同組合関連の情報、知識、理論、思想に接することは限りなくゼロに近い。現在日本協同組合学会では、全国の大学に協同組合関連の講義がどの程度存在するか調査を進めているときくが、農学系以外で「協同組合論」が設置されている大学・学部はほんの数えるだけ、しかもそれがさらに減少しつつあるようだ。筆者が担当するその数少ない講義には、日本でももっとも生協が発達し

た地域で生まれ、幼少のころからコープに囲まれて育ってきたという学生も多く参加しているが、彼ら・彼女らが異口同音に言うのは、「スーパーとコープがそんなに違うものなんて初めて知った」である。

100年以上前、イギリスでロッチデールが目覚しい躍進を遂げていたころ、経済学を学ぶ若者たちは誰でも必ず協同組合のことを学んでいたはずである。当時の大経済学者たち、イギリスのJ・S・ミル、マーシャル、あるいは大陸のジェヴォンズ、ワルラスといった人々は、それぞれ微妙に異なった見解をもちながらも皆等しく協同組合に関心を寄せ、著書のなかの1章を協同組合に対する言及で埋めていた。いまの一般経済書、経済学入門書では決してありえない光景であろう。（筆者が知るほとんど唯一の例外は、相撲協会が年少の力士向けに編んだ経済のテキストで、そこではなぜか協同組合が数章構成のなかで堂々と1章をあてられていた。）

こういう状況下では、協同総研など協同組合系研究所に課せられる使命、寄せられる期待がますます大きくなっていく。しかし、もちろん若者の協同組合離れは、若者の側だけではなく、協同組合の側にも原因があったのである。かつて協同組合は、農民の地位向上、消費者の権利保護、学生生活の防衛、働く労働者の主権獲得、等々のスローガンを高く掲げ、それを協同の力で実現しようと協同組合への結集を訴えた。それに感銘して、協同組合に集まってきた若い組合員がたしかに昔は大勢いたのである。しかし現在、とくに農協や生協といった伝統的な協同組合では、その手法が通用しなくなっている。いま若い力を集めて元気に活動している大学生協や地域生協の例を見ると、そこでは大上段に振りかざした理念からではなく、ほんの些細な日常の一齣から、若い人々が生協に集まってくるのを見て取れる。大学生協で元気に活動している学生たちを突き動かしているのは、アメリカ帝国主義打倒の信念ではなく、パフェを食堂においてほしいという女子学生たちの切実な(?)思いである。地域生協がつくるニュースに登場するのは、政府や大企業の横暴への怒りを訴える主婦ではなく、子供がコープの配送車のミニカーを欲しがっているのになんとかして欲しいというお母さんである。

こうしたごくふつうの若い組合員がもっている、個々のさまざまな日常の願いを、協同組合運動のなかに取り込み、それをさらに「協同」をめざす運動へと高めていくための道筋を示すこと、これがこれから協同組合の連合会なり研究所なりにもとめられる機能ではないか。伝統的な協同組合ばかりでなく、労働者協同組合運動においても、いずれそれが大きな課題となるのではないかと思うのである。